

# 13世紀のイタリア人司教座聖堂参事会員が諭す ドイツ宮廷のミンネ観

尾野 照治

## I.

イタリア人聖職者トマジン・フォン・ツェルクレーレ<sup>1)</sup>は、1215年頃にイタリアからドイツの宮廷に招かれ、そこでキリスト教倫理に基づく騎士道徳の教科書とも言うべき「異国の客」<sup>2)</sup>を著した。俗界の宮廷世界における模範的騎士道を、聖界のキリスト教倫理と一致させようとする試みである。この頃は、前世紀後半から続く宮廷恋愛が、以前ほど盛んではないにせよ、まだ文芸の重要なテーマになっていた時代である。12世紀中頃に南フランスから、新しい恋愛作法がドイツに伝播した。その世紀末から13世紀初めにかけて、ミンネザングの巨匠と称されるヴァルターやラインマルらによって、フランスの恋愛歌謡が完全に消化され、ドイツ独自の要素も加わった新しいミンネザングが、数多く生み出された。それと同時に、宮廷叙事詩のジャンルでも、この新しいミンネをテーマとする作品が、やはり数多く生産された。これらの作品世界では、社会的地位が高く美貌と教養に優れた王妃や既婚の貴婦人達に、騎士達が奉仕するという形の宮廷恋愛が、騎士の人格陶冶に資するものとして、随分ともてはやされた。しかし、それはあくまで宮廷という世俗の世界での現象である。他方、聖職者達の世界では、この現象をどのように見ていたのであろうか。その確かな証言者として、この論考ではトマジンを取り上げる。彼は聖俗の両世界に足を置きながら、しかも異国の客人として、ドイツの宮廷でこれをつぶさに観察し、詳細な騎士道徳を説いたからである<sup>3)</sup>。彼のような広い視野をも

つ詩人は、きわめて稀であると言ってよい。それゆえ、当時のミネ観を総合的に探求するためには、とりわけトマジンの思想を考察することは必須である。

「異国の客」は全10章から成り、その第1章<sup>4)</sup>は、他の章と比べて相当に行数が多く、しかも若者達に対する教えを厳しく説いているので、詩人が最も力を傾注した章であることがわかる。騎士や貴婦人になる前に、若者たちの倫理の基礎を確実なものにし、それに道徳的自覚を与えようとの意図である。そのことは更に、ミネに生きミネの奉仕に勤めた、数多くの叙事詩の登場人物達の名前が、次々に挙げられていることから明らかである。当時の宮廷の貴婦人達が、模範として仰ぐべき理想の女性として、ギリシャの叙事詩に登場する女性達の名が挙げられる：Andromache, Ênit, Pénélopê, Oeononê, Galjênâ, Blanscheflôr, Sôrdâmôr：「彼女らは皆が皆女王ではなくても、すばらしい分別の点で女王であると言うことができる」<sup>5)</sup> それとは逆に、決して模範としてはならないHelenâの名も挙げられる：「婦人たちは、ヘレナという名の女性の欠点に注意すべきだ。ヘレナは、あらゆる国々を支配するギリシャで、権力を誇る女性であった。彼女はとても美しかったが、思慮分別に乏しかった。それゆえ、彼女の美しさは彼女自身に、大きな恥辱をもたらすことになった。思慮分別に欠けると、美貌は価値がない」<sup>6)</sup> 女性達の名と同時に、模範として仰ぐべき理想の男性として、帝王や円卓騎士達の名が挙げられる：Gâwein, Clies, Êrec, Îwein, Artûs, Karl, Alexander, Tristan, Seigrimos, Kârlogriant, Parzivâl：「気をつけてよく見よ、なんとまあ円卓騎士達は、先を争って勇敢に、手柄をたてようと押し寄せたことであろう。若者達よ、怠惰に身をまかせな。立派な人々の教えに聞き従いなさい。そうすればあなた方は、大きな名誉を得られるであろう」<sup>7)</sup> それとは逆に、決して模範とするべ

きではない男性として、Keyの名も挙げられる：「あなた方はカイ殿に従ってはならぬ。彼のせいで私の身に、多くの恥辱がふりかかるので。彼はあらゆる点で、私を窮地に陥れるのだ」<sup>81</sup> これから詩人のミネ観を考察するに当たって、この詩人がミネそれ自体にいかなる考え方を持っているのかを探求する前に、ミネが描かれている幾多の冒険物語（宮廷叙事詩）に対して、詩人がどのような評価を与えているのかを、あらかじめ検討しておかなければならない。

## II.

聖職者かつ教訓詩人であるトマジンは、数多くの冒険物語がある中で、人は一体何を聞きどれを読むべきかを簡潔に述べた後、分別のある大人とまだ分別が身につけていない若者とでは、異なった指導がなされるべきであると説く。若者は作り話を好みがちで胸をはずませやすいのではあるが、分別のある大人はできる限り作り話を避け、絶えず真実を求めるように努めるべきである。分別がまだ十分に身につけていない若者たちは、せめて心をわくわくさせる冒険物語からでも、正しい生き方のヒントを学び取るべきである。それゆえ、作り話としての冒険物語を創作する人も、その存在価値を大いに認められる。騎士が多くの苦難に耐えた後に憧れの女性と結ばれる物語は、若者たちの心に、これからの苦惱多き人生と、希望を達成する喜びに対して、あれこれの心構えをさせるからである。

ave die ze sinne komen sint  
 die suln anders dann ein kint  
 gemeistert werden, daz ist wâr.  
 wan si suln verlâzen gar

diu spel diu niht wâr sint:  
dâ mit sîn gemüet diu kint.  
ich enschilte deheinen man  
der âventiure tihten kan:  
die âventiure die sint guot,  
wan si bereitent kindes muot.  
swer niht vûrbaz kan vernemen,  
der sol dâ bî ouch bilde nemen<sup>91</sup>.

〈しかし分別が身についている大人は、若者とは異なったやり方で導かれるべきだ。このことは真実だ。なぜなら、大人は真実ではない話からすっかり離れるべきだから。もっとも若者らはそのような話に、はらはらさせられるのではあるが。私は、冒険物語を作るすべを心得ている人を非難しない。冒険物語は良い。というのは、そのような物語は、若者の心に準備をさせるからだ。冒険物語以上に聞き知るすべを持たぬ人は、その物語をも手本にすべきである。〉

13世紀のその当時、騎士でさえもその多くは、読み書きさえできなかった。ましてや騎士見習いの若者たちや農民たちは、ほとんど文盲同然であったと思われる。そのような状況の中でトマジンは、絵画や彫刻の効用にも着目する。物語を書く能力のある人は、庶民のためにそれを書くべきであるし、絵画を描く技術を持つ人も、それを描き続けるべきであると主張する。立派な教えを説く書物は、一般庶民にとって理解が困難である。そのようなときには、視覚によって理解が容易になる絵画を見て、おおよそのところを理解するのが好ましい。最高の教育を受けた司祭は、立派な書物を深く読み込み、他方教育を受けられなかった庶民は、絵を見て学ぶべ

きである。真理を述べた高等な書物の深い意味を読み取れない人は、その代わりに娯楽的な冒険物語を読むことによって理解力を高め、分別をより良きものにすることができる。そのようにして理解力が高まったら、作り話からレベルを高めて立派な書物を読み、「作法の教え」「分別」「真理」を、自分のものとするように励まねばならぬ、と詩人は説く。

swer schriben kan, der sol schriben;  
swer mâlen kan, der sol beliben  
ouch dâ mit; ein ieglicher sol  
tuon daz er kan tuon wol.  
von dem gemâltten bilde sint  
der gebûre und daz kint  
gevreuwet oft: swer niht enkan  
verstên swaz ein biderb man  
an der schrift verstên sol,  
dem sî mit den bilden wol.  
der pfaffe sehe die schrift an,  
sô sol der ungelêrte man  
diu bilde sehen, sit im niht  
diu schrift zerkennen geschiht.  
daz selbe sol tuon ein man  
der tiefe sinne niht verstên kan,  
der sol die âventiure lesen  
und lâz im wol dermite wesen,  
wan er vindet ouch dâ inne  
daz im bezzert sîne sinne,

swenner vürbaz verstên mac,  
sô verlies niht sînen tac  
an der âventiure mære.  
er sol volgen der zuht lêre  
und sinne unde wârheit<sup>10)</sup>.

《文章を書く心得のある人は、書き続けるべきである。絵を描くすべを知っている人も、絵をいつまでも描き続けるべきだ。だれでも、自分が見事にできることをするべきである。描かれた絵によって、農民や若者はしばしば喜びを得る。立派な人が書物において理解すべき事柄のわからない人は、絵画で満足するがよい。司祭は書物をしっかり読み、他方無教育な人は、書物がわからないから絵画を見るべきだ。深い意味のわからない人も同様に、冒険物語を読むべきである。その人は、冒険物語で十分に満足するがよい。なぜなら、冒険物語の中にも、彼の分別をより良くするものを見出せるからだ。しかし、冒険物語以上に理解できる場合には、その程度の物語を読むことで、日々を無駄にしないようにせよ。作法の教えと分別と真理に従うべきだ。》

冒険物語は周知のごとく、フィクションで飾られているものであるが、そうだからといって決して非難すべきものではない、と詩人は主張する。なぜなら、それは正しい宮廷作法と真実を、比喩的に表しているからだ。聴覚によって楽しめる物語ばかりではなく、視覚によって喜べる彫刻もまた有効である。人物像の彫刻は勿論実際の人ではないが、しかし、少なくともそれが人を表現していることは、だれの目にも十分に伝わる。それと同様に物語も、多くの場合事実でないことが描かれているが、それでもそのような物語から、人生を正しく立派に過ごすためには、何をしなければ

ならないかを学び取ることができる。

die âventiure sint gekleit  
dicke mit lüge harte schône:  
diu lüge ist ir gezierde krône.  
ich schilt die âventiure niht,  
swie uns ze liegen geschiht  
von der âventiure rât,  
wan si bezeichnenunge hât  
der zuht unde der wârheit:  
daz wâr man mit lüge kleit.  
ein hülzîn bilde ist niht ein man:  
swer ave iht verstên kan,  
der mac daz verstên wol  
daz ez einen man bezeichnen sol.  
sint die âventiur niht wâr,  
si bezeichent doch vil gar  
waz ein ieglich man tuon sol  
der nâch vrûmkeit wil leben wol<sup>111</sup>

〈冒険物語はしばしば、フィクションで非常に素晴らしく着飾っている。フィクションは最高の飾りとなっている。冒険物語に促されて、私たちはついフィクションを扱うのだが、それでも私は、その物語を非難しない。というのは、冒険物語は宮廷作法と真実の比喩的な意味をもっているからだ。つまり真実は、フィクションでくまれているのだ。木に彫られた人物の彫刻は、実際の人ではない。しかし、物を解せる人ならその彫刻が、

人を表していることを十分に理解できる。冒険物語が真実でなくても、その物語はまことに、自分の立派さにふさわしく暮らそうとする人なら誰もが、何をすべきかを教えてくれるのだ。》

トマジンは、良い冒険物語は宮廷作法を高める効用があるので、それらの多くの物語をドイツ語に訳して、人々の目にふれるようにしてくれた詩人たちに、感謝の言葉を述べる<sup>12)</sup>。しかし、トマジンが望むのは、フィクションの物語ではなくて真実の物語である。人の心というものは、嘘によるよりも真実によってこそ、はるかにもっと高められるものである。宮廷人が物語を作るなら、できる限りフィクションを避けて、真実を材料にすべきである。まぎれもない真実で固めた物語は、私たちに多くのことを、ストレートに教えてくれるからだ。物語を好ましい方向へ向けるべく努めれば、物語を作るのに失敗することは決してないと説く。トマジンが、本来は世俗の世界に属するのではなく、聖職の世界に属する人であるという事実が、強く真実を求めるこの態度に明確に現れている。

doch wold ich in danken baz,  
 und heten si getihtet daz  
 daz vil gar ân lüge wære;  
 des heten si noch grøezer ère.  
 swerz gerne tuon wil,  
 der mag uns sagen harte vil  
 von der wârheit, daz wær guot.  
 er bezzert ouch unsern muot  
 mit der wârheit michels baz  
 denn mit der lüge, wizzet daz.

swer an tihten ist gevuoc,  
der gewinnet immer gnuoc  
materje an der wârheit:  
diu lüge sî von im gescheit.  
dâ von sol ein hüfsch man  
der sich tihten nimet an  
vil wunderwol sîn bewart  
daz er nicht kome in die vart  
der lüge; ist er lügenære,  
sô sint danne sîniu mære  
gar ungenæme. ein man sol,  
swer iht kan sprechen wol,  
kêrn sîn rede ze guoten dingen,  
sô mag im nimmer misselingen<sup>13)</sup>.

〈しかし、もし物語作者達が、まったく嘘のない物語を作ってくれていたなら、私は彼らにもっと十分にお礼をするであろう。そのことによって、彼らはずっと大きな名誉を得られるであろう。嘘のない物語をすすんで作ろうとする人は、真実について私たちにひじょうに多くのことを話することができる。そうなれば素晴らしいことであろう。その作者は私たちの心をも、嘘よりも真実で、はるかにもっと高めてくれる。そのことを覚えておきなさい。物語を作るのに巧みな人は、いつも真実の点で十分な材料を獲得する。嘘はその作者から引き離されるがよい。それゆえに、物語を作り始める宮廷人は、嘘の道に迷い込むことのないように、しかと見守られるべきだ。彼が嘘をつく人なら、その物語は全く不愉快千万なものである。見事に物語るすべを心得ている人は、自分の語りを真実の立派なものに向けるべきだ。そうすれば、

彼が物語で失敗することは決してありえない。》

### III.

トマジンは上述のごとく、ミンネが描かれた数多くの冒険物語の効用について詳しく説明した後、正しい宮廷作法を守りながら恥辱を避け、幸せな生活を送ろうと欲する人は、良い分別を土台にしてミンネに携わるべきであると説く。そのとき、ミンネに二面性があることを自覚せねばならない。賢明な人をより賢明にし、愚かな人をもっと愚かにするのが、ミンネの本質である<sup>19)</sup>。分別を持たない人が婦人とのミンネを楽しもうとするのは、手綱がなく拍車の効かない馬を操るに等しい。手に負えないほど燃えさかる火で、火傷を負うのと同様である。分別が賢明なやり方でミンネを支配できなければ、ミンネは賢者の心を鈍感にしてしまう。常に清らかでなければならぬ魂、肉体、名誉、財貨を、ミンネは汚してしまう。これは、当時の宮廷社会がすでにそのような状況にあることを、深く悲しみ嘆く詩人の声である。

ich seit daz man der mine kraft  
mit schœnem sinne tragen sol,  
swer âne schant wil leben wol.

Der minn natûre ist sô getân:  
si machet wîser wîsen man,  
und gît dem tôrn mêr nârrischeit,  
daz ist der minne gewonheit.  
die sporn vüerent durch die boume  
daz ros daz dâ vert âne zoume:

alsam vert der der âne sinne  
wænt spiln mit der vrouwen minne.  
si vüert in hin über die boume,  
riht ers niht mit des sinnes zoume.  
daz viwer ist nütze unde guot,  
swer im niht unrehte tuot.  
gewinnt daz viwer überkraft,  
daz man im læt die meisterschaft,  
so ist verlorn und wüeste gar  
swaz ez begrîfet, daz ist wâr.  
al dazselbe ist umb die minne,  
ob si undermacht die sinne;  
si blendet wîses mannes muot  
und schendet sêl, lîp, êre und guot  
swer zem viwer nâht ze hart  
der besengt dick sînen bart<sup>15)</sup>.

《恥をかかずに幸せに暮らそうとするなら、ミンネを素晴らしい分別で荷って行くべきである、と私は語った。ミンネの性質は次のようである：ミンネは賢明な人をもっと賢明にし、愚か者にはもっと多くの愚かさを与える。これがミンネの習性だ。手綱をつけずに駆けていく馬を、森で導くのは拍車である。分別を備えずに婦人の愛を弄ぼうとする人は、その馬と同じように振舞う人だ。その人がミンネを、分別という手綱によって導かないのなら、ミンネはその人を森の彼方へと連れ去る。火に対してなにも悪さをしなければ、火は有用かつ有益である。支配する力を与えられるほど過剰な力を火が獲得すると、火が掴む物はすべて灰になり荒廃する。これ

は真実だ。ミンネについても全く同様で、ミンネが分別を押さえ込むなら、ミンネは賢者の心を盲目にし、魂、肉体、名誉、財貨を汚す。火に近づき過ぎる人は、しばしば髭を焦がすのだ。》

トマジンの考えるところでは、ミンネに三種類ある。魔術によって得られるミンネ、強制によって得られるミンネ、金や贈り物によって得られるミンネの三種である。魔術や特殊な技を使って貴婦人を獲得するのは、強姦するに等しい。また、暴力をふるって強制的に貴婦人を獲得するのも、宮廷の礼儀作法に無知な男がとる行動である。このように、詩人はまずはじめに、これら二種のミンネを否定する。

gezoubert und betwungen minne  
und gekouft sint unminne.  
swer mit zouber umbegât,  
wizt daz er genôtzogt hât  
swelche er gewinnt dâ mite;  
er hât unhüfsches mannes site.  
er hât gar einn unhüfschen muot,  
der den wiben gwalt tuot<sup>16)</sup>

《魔術によって得られたミンネ、強制によって得られたミンネ、金で買われたミンネは、どれも正しくないミンネである。魔術と付き合いのある者が、それを用いて婦人を獲得すれば、強姦したことになるということを、あなた方は覚えておきなさい。そいつは、非宮廷的な礼儀作法を身につけている奴だ。また、婦人らに暴力をふるう輩も、全く非宮廷的な卑しい心の持ち主だ。》

次に三番目のミンネ、つまり金や贈り物によって得られるミンネについて、トマジンはこれから特別に詳しく説明を行う。素晴らしいミンネを獲得しようとする人は、贈り物によってミンネを得ようとしてはならない。なぜなら、財貨を贈り物としてミンネを得ようとする、相手の婦人が騎士自身を愛しているのか、それとも彼の財貨を狙っているのか区別ができないからだ。真に彼のことを婦人が楽しんでくれているのか、また宮廷作法が自分自身に備わっているのか、彼は自信が持てない。しかし、どのような場合にも贈り物をするのが否定されるというわけではない。それが許される場合もある。騎士の激しい恋心が平常にもどり冷静になってから、婦人が贈り物を所望する場合には、それを彼女に贈ってもよい。なぜなら、そのときには財貨で婦人の心を買取ったことにはならないからだ。この場合、上述の三番目のミンネには当てはまらない。しかし、騎士自体が軽蔑すべき人なら、宮廷作法には全く無関心ゆえ、何を説いても無駄である。そのような輩は、無条件に贈り物をする事は決してない。必ずミンネを担保にして、金品を差し出してくる。ミンネを手に入れる交換条件として贈り物をするのであるから、売買行為を生業とする商売人と同じやり方である。何も見返りを求めずに、困っている人に気前よく贈り物をするのが、本来の宮廷作法と見なされている。金品で買われたミンネは、それが本来内包する力を持っていないので、そのようなミンネは自分の身につかぬ。純粋な心から出たミンネ、物質色の消えた精神的なミンネのみが、正当な宮廷作法にかなうもので、そののみが自分のものとなるミンネである。聖職界出身の詩人ゆえ、論理的に突き詰めた思考を展開していく。

Ich lërte, swer guot minn hân wolde,  
 daz ers mit gâb niht werven solde.  
 swer umbe minne wirbt mit guot,

der erkennet niht des wibes muot,  
ob si im sî von herzen holt  
od ob si neme vür in golt.  
ern weiz sîn selbes hüfscheit,  
ob si werd durch in gemeit.  
wirt aver er dar nâch inn  
daz si kêrt ir gemüet an in,  
bedarf si dann iht des er hât,  
so gebeze ir von mînem rât.  
ich weiz wol daz disiu mære  
sint den böesen vil unmære,  
dâ von daz ein böesewiht  
kan mit hüfscheit werven niht.  
sîn gewerft ist setzen phant;  
er nimt unde gît zehant.  
swer mit hüfscheit niht werven kan,  
der wirt billich ein koufman.  
gekouft minn hât niht minne kraft:  
sine kumt niht in eigenschaft<sup>17)</sup>.

《良いミンネを得ようとする人は、贈り物によってそれを得ようとするべきではないということ、私は教えてきた。財貨によってミンネを得ようと努める人は、婦人が自分を心から愛してくれているのか、あるいは婦人が自分よりも黄金の方を選び取るのか、彼女の気持ちがわからない。彼のおかげで婦人は心楽しめるのかどうか、彼には自分自身にそのような宮廷作法が身についているのかどうか、わからない。しかし後になって、彼女が

心を彼に向けていたことに気づき、その後彼の持っている財貨を彼女が欲しがらば、私の助言に従って、彼女に財貨を贈るがよい。軽蔑すべき連中は、宮廷作法によって何も得るすべを知らないのです、このような教えが彼らにとって、全くどうでもよいことであるのはわかっている。彼らが行うことは、担保をわたすことなのだ。質草をもらえば、すぐに財貨を差し出す。宮廷作法によって何も得るすべを知らない者は、商人になって当然である。金で買われたミンネは、ミンネの効力を持たぬ。そのようなミンネは、自分のものにはならないのだ。》

これから詩人は、ミンネの自立性を強調していく。ミンネは本来隷属するものではなく、自由なものである。ミンネと心を獲得するものは、分別と作法でなければならぬ。分別と作法によるのであれば、ミンネは自由なものとなる。ミンネと心を財貨が獲得するなどということは、絶対にあってはならないことだ。もしミンネが財貨によるのであれば、それは完全に縛られていて、隷属状態にあると言ってよい。相手の心を得るためには、自分の心を差し出すべきであり、誠意を得るには誠意を、愛を得るには愛を差し出さなければならぬ。ミンネを得るために財貨を差し出す人は、ミンネの本質も人の心の機微もわかっていない人だ。心、誠意、愛に加えて、心変わりせぬ気持ちで誠実と真実を不動のものにしておけば、贈り物によって邪悪なものを良きものにすりかえようとする愚行を、犯さないですむ。

Ein ieglichr hât wol die sinne  
 daz er weiz, möht man koufen minne,  
 daz diu minn wær eigen gar:  
 sus ist diu minne vrî, deist wâr.  
 swer wænet koufen minn umb guot,

der erkennet weder minn noch muot,  
wan bêdiu muot und minne  
suln uns bejagen unser sinne  
und unser zuht niht unser guot.  
man sol muot geben umbe muot,  
man sol mit triuwe triuwe gern,  
mit liebe sol man liebe wern,  
man sol mit stæte stætekeit  
vesten und die wârheit.  
swer mit gâb wænt machen guot  
daz übel, den triugt sîn muot<sup>18)</sup>.

〈ミンネを買うことができるなら、そのミンネは全く隷属状態のものであるということが、誰にもわかると思われる。だがそれとは逆に、ミンネというものは自由なものである。このことは真実だ。財貨と交換にミンネを買おうと思う人は、ミンネも人の心もわからない人だ。というのは、心もミンネも私たちの分別と作法が獲得すべきものであって、財貨が獲得すべきものではないからだ。人は心と交換に心を与えるべきであり、誠意によって誠意を望むべきであり、愛によって愛のお返しをするべきであり、変わらぬ心によって誠実と真実を固めるべきである。贈り物によって、邪なものを良いものにしようとする人を、その人の心が欺いているのだ。〉

次に詩人は、ミンネを求める男のくだらぬ場合を述べる。自分の命を、名誉のためにも神のためにも全く捨てられなくせに、離れていこうとする婦人に熱をあげて財貨を贈り、そのあげくに人々から笑いものにされ、恥をしのんで生きていかなばならぬ男がいる。婦人から見れば、そのよう

な男は馬鹿であり間抜けである。彼女はもはやその男に愛情を抱けないのに、高価な服をねだったり、男に二股をかけようとしたりして、いつもとは違った行動をとりたいたときには、今でも彼を愛しているかのように、べたべたと甘えてみせる。そうしながら、もっとたくさん贈り物をくれる男性の方に、た易くなびいていく。このような女性は無論、徳操をもつ立派な貴婦人では決してない。心変わりをするのは、不徳に支配されていることの証明になるからである。他方また、財産家の婦人から望まれるままに、多くの財貨を贈り物にする男がいる。それでいて、貧困に喘ぐ婦人には、なんら救いの手を差し伸べようとしなない。このような男も、宮廷作法が身についていない愚か者である。社会的に弱い女性、貧しさに苦しんでいる女性にこそ助力をするのが、宮廷作法に従った徳操豊かな振る舞いである。

Ein man der nie kunde geben  
 lützel noch vil gar sîn leben  
 weder durch êre weder durch got,  
 der gît im selben dick ze spot  
 und ze laster ein grôz guot  
 einem wîbe diu ir muot  
 von im kêrt. diu hât in ouch  
 vür einn tôrn und vür ein gouch.  
 si zeigt im liebes harte vil,  
 swenn si iht anders tuon wil;  
 wan gît ir ein ander mêr,  
 sô ist aver ir lieber der.  
 ich enmeine dehein wîp guot  
 diu dâ hât tugenthaften muot.

sô ist aver ein ander man  
der ze hüfscheit niht enkan,  
der gît eim wibe swaz si wil,  
diu von ir selben hât zevil.  
ein andriu diu dâ niht enhât  
belibt ân helfe und âne rât<sup>19)</sup>.

《名譽のためにも神のためにも、自分の命をすっかり差し出すことが全くできない人は、彼から心を離していく婦人に、自分自身の嘲笑の種として、また恥辱として大きな財貨を与える。実際彼女も、彼を馬鹿、間抜けと見なす。彼女は、いつもとは違った行動をとりたときは、その愚かしい男にひどく甘えてみせる。というのは、他の男が彼女にもっとたくさんの贈り物を与えれば、彼女はその男の方を好きになるからだ。私が今言っているのは、徳操ある心を持った婦人のことではない。しかしまた別に、宮廷作法を心得ていない男がもう一人いる。彼は、自ら莫大な財産を持っている金満婦人に、彼女が欲するものをなんでも与える。だけど、財産を持っていない別の婦人には、援助も助言もしないままにいるのだ。》

くだらぬ男の例が更に述べられる。くだらぬ男がミンネを求めて、自分の生活のために蓄えてきた財貨を、もっとくだらぬ婦人に与えて、すっからかんになることがよくある。不名誉なやり方で獲得するものを、また同じように不名誉なやり方ですっかり失うのは、世の常である。そのような愚かしい振る舞いを避けて、自分自身のために蓄えているものを、貧しい哀れな婦人に差し出すなら、必ずや神の祝福を受け、報われることになるであろう。その逆に、独力で莫大な財貨を蓄え、もうそれ以上は必要ない婦人に、自分がやっとのことで貯めてきた財貨を贈るなら、その人は当然

世間の笑いものになる。財貨を必要としている貧しい人に、それを分かち与えようとしなのは、心がケチであるからだ。財貨を全く必要としない金満家の婦人に、なけなしの自分の財貨を分かち与えようとするのは、心がマヌケであるからだ。心の中に宿っている吝嗇と愚かさが、そのような恥ずべき生活をさせる元凶であると、詩人は言い切る。

daz ein man spart sînem lîbe,  
 daz gît er dicke einem wibe  
 diu noch wirser ist dan er:  
 swaz man erwirbt mit unêr,  
 daz sol man verliesen gar  
 ouch mit unêren, daz ist wâr.  
 gæbe erz doch eim armen wîbe,  
 daz er spart sînem lîbe,  
 des hiet er lîhte danc von got.  
 sus macht er ûz im selben spot,  
 daz er niwan den geben wil  
 die von in selben hânt ze vil  
 nu wizzet von der wârheit,  
 daz macht erge und nerrescheit.  
 ein man der ist niht sinnic wol  
 der dâ gît dâ er niht ensol:  
 sô ist der ân erge niht  
 dem niht ze geben geschiht  
 dâ erz von rehte solde geben;  
 der hât ein lesterlich leben<sup>47</sup>

《ある男は、自分のために蓄えている財貨を、自分よりずっとつまらぬ婦人にしばしば与える。人は不名誉に獲得するものを、同じように不名誉にすっかり失う。これは真実だ。しかし、もし彼が自分のために蓄えているものを、貧しい婦人に与えるならば、そのことによって彼は、神から容易に報われるであろう。しかしそれとは逆に、独力で貯めこみ過ぎている婦人たちにのみ、財貨を与えようとすることによって、彼は自分自身を笑いものにしてている。さあ、真実についてよく覚えておきなさい、その原因はケチとマヌケの心なのだ。行ってはならぬ所へ行く人は、確かに分別を持たぬ。当然与えるべき所に与えようとしない人は、まさにケチそのものである。その人は、恥ずべき生活をしているのだ。》

#### IV.

トマジンは上で、三種類のミネについて詳しく述べた。これから詩人は、ミネの対象となる婦人において、彼女の内面の美と外面の美の、いずれがより重要であるかを論じていく。外面の美的完全性と内面の道徳的完全性は、貴婦人において常に一致していなければならない。しかし、モールンゲンらの世俗の宮廷詩人たちは<sup>21)</sup>、しばしば外面的な美に価値を置いたが、トマジンのような聖職身分の教育詩人たちは<sup>22)</sup>、たいてい内面的な徳操の方に、より大きな価値を置いた。

愚かな男はミネに携わるとき、婦人の外面的な飾りに目を奪われて、内面の徳操や分別を吟味しようとしない。その反対に、賢明で立派な男は、婦人の外面ばかりを見るのではなく、内面の心の機微やしとやかな所作にも注意を向ける。詩人なら、見事な鞍をつけた駄馬よりは、鞍をつけていない駿馬を選ぶと言う。馬を選ぶときは、飾り立てた馬ろくを見るのではなくて、馬そのものの体つき、腿や足を厳密に観察すべきであると教える。

権勢をひけらかし、明らかに不当と思われる贅沢三昧の生活を送る婦人よりも、裕福ではないものの内面的に立派な婦人の方が、ミンネの相手としてずっと相応しい。ミンネにうってつけの立派な婦人を選ぶ際にも、馬選びと同じ方法を探るべきである。

Ein tørscher man der siht ein wîp  
 waz si gezierd hab an ir lîp.  
 er siht niht waz si hab dar inne  
 an guoter tugende und an sinne.  
 sô merket ein biderb man guot  
 ir gebærde und ouch ir muot.  
 hât ein ros satels niht,  
 ez ist dar umbe niht enwiht.  
 ist ein guot wîp niht ze rîche,  
 ir ist doch harte ungelîche  
 ein iegelîch rîchez wîp  
 diu nâch unreht hât ir lîp.  
 ob ich ein ros koufen solde,  
 den zoum ich niht schouwen wolde  
 mêt dan daz ros; ich wolde halt  
 sehen wie ez wære gestalt  
 und welch bein und welhe vuoz  
 ez hiet. daz selbe tuon muoz  
 swer ein guot wîp welen wil<sup>231</sup>

《愚かな男は、婦人がどのような飾りを身につけているかを見る。婦人が

内面に、立派な徳操や分別の点で何を備えているかを見ない。それに対して立派な男は、婦人の所作や心の動きに留意する。ある馬は鞍をつけていないからといって、無価値ということにはならぬ。立派な婦人があまり裕福でなくても、金満家でありながら不当に生活を送る婦人はだれも、彼女と肩を並べることは決してできない。私が馬を買わなければならないとしたら、私は馬そのものを見る以上には、馬ろくを見ようとしたりはしないであろう。私ならまさしく、馬がどのような姿をしているか、馬がどのような腿や足を持っているかを見ようとするであろう。立派な婦人を選ぶとする人は、馬選びと同じことをしなければならぬ。》

トマジンは、婦人の外面よりも内面の方を、もっと重要視する。物質的なものよりも精神的なものを、もっと価値多きものとする。更に、金持ちの婦人の財産を浪費することによって彼女に損害を与える男は、決して立派な男とは言えない、と持論を展開する。婦人の側が損害を与えるような振る舞いをするのも、勿論立派な婦人にあるまじきことであるが、それよりもむしろ、相手の財産に損害を与えるという行為は、男性にこそ相応しくないことである。そのような大それた行為に走るくらいなら、暴力で相手の財産を奪う方がまだましであるとさえ、詩人は口をすべらせる。

ern sol ahten niht ze vil  
waz si habe, merke daz  
ob si si guot: er tuot baz;  
wan mit eim armen wibe guot  
mac man wol hân vrœlichen muot,  
und mit eim rîchn unguotem wîp  
mac man hân unvrœlichen lîp.

Ich lêrt daz dehein biderbe man  
 niht enkêr sînn muot dar an  
 daz er abe preche eim wîbe ir guot.  
 wan swelch wîp daz getuot,  
 ez stât ir vil boeslîche:  
 doch stât ez wirser ungeliche  
 einem man, daz sult ir glouben.  
 wizzt daz ich gerner wolde rouben<sup>24</sup>

〈その人は、婦人が何を持っているかということに、あまり注意を払い過ぎるべきではない。むしろ彼女が立派であるかどうかということに留意するがよい。そうする方がよい。というのは、貧しくても立派な婦人と一緒なら、確かに喜ばしい気持ちを抱くことができるが、裕福でもくだらない婦人と一緒では、悲しい生活を送ることになるからだ。立派な男はだれも、婦人の財産に損害を与えてやろうと思つてはならぬ、ということをお前は教えた。というのは、どの婦人でもそのような行動をとれば、まことに彼女に似つかわしくないからだ。だが、そのような振る舞いは、婦人の場合とは比べようのないほど、男には似つかわしくない。そのことを、あなた方は信じなさい。覚えておきなさい、私はそのようなことをするくらいなら、暴力で財産を奪いたいと思う。〉

ここからは、婦人が男性から贈り物を受け取る場合に、どの程度の贈り物まで許されるかということが、具体的に説明される。宮廷作法を心得ている婦人は、必要もないのに過分な贈り物を受け取ってはならぬ。ただし、多くの贈り物を受け取っても、そのような財貨よりも相手の男性の方が、ずっと大切であることを十分に示すことができれば、それは許されてよいのだ。しかし、そのことを明確に示すことができなければ、金銭欲に勝る

彼女は、偽りの心を抱いていることになり、相手の男性を愛していないことが明らかとなる。

Ich lêrt waz einer vrouwen zeme  
daz si von ir vriunde neme:  
hantschuoch, spiegel, vingerlîn,  
vürspangel, schapel, blüemelîn.  
ein vrouwe sol sîn wol behuot  
daz si niht neme grœzer guot,  
ezn wær daz sis bedorfte wol:  
so erloube ich ir dan daz si sol  
nemen mêre und niht sô vil,  
sin erzeige wol daz si wil  
daz ir der vriunt sî vür daz guot,  
wan anders hiet si valschen muot.  
ob ir ze nemen iht geschiht  
mêr, bedarf sis danne niht,  
ir ist der vriunt niht liep gar,  
daz sol man wizzen wol vür wâr<sup>25)</sup>.

《婦人が愛する男性から何をもらうのがふさわしいかを、私は教えた。それは、手袋、鏡、指輪、ブローチ、頭飾り、花束である。婦人は、その必要がないのであれば、それ以上の品物をもろうことのないように、十分に注意すべきだ。だが、その必要があるときには、彼女がもっとたくさんもらうことを、私は彼女に許す。しかし、財貨よりも愛する人の方が大切であるのを望んでいるということを、彼女が十分に示すのでなければ、それ

ほどたくさんの物をもらうのを、私は彼女に許さない。というのは、さもないければ彼女は、偽りの心を抱いていることになるからだ。彼女はその必要もないのに、愛する人からもっとたくさんの財貨をもらうことになれば、彼女はその人を全然愛していないということになる。人はそのことを、確かに真実であると知るべきだ。)

トマジンはミンネについて、結婚している二人(夫婦)の間のミンネと、結婚外の二人の間のミンネを、これまで明確に区別してこなかった。しかしここで、キリスト教に基づく宮廷倫理を説く立場にある詩人は、世俗のミンネについても踏み込んだ主張をして、両者を厳密に区別しながら論を進めていく。既婚婦人には、神の前で永遠の愛を誓った夫がいる。夫がいるゆえに夫人と称されることを厳粛に思い返し、一夫一婦を乱すミンネに関わるべきではない。以前の宮廷恋愛<sup>26)</sup>はいざ知らず、詩人の時代の宮廷では、もうすでにかつての騎士精神が形骸化しており、そこでの宮廷恋愛はもはや、騎士に宮廷作法を身につけさせる力を持っていない。しかも、今の宮廷恋愛を成り立たせているものは、偽り、自慢、邪悪な監視、心変わり、高慢などの不徳ばかりである。女性が結婚前に純潔を守りぬき、結婚後も他の男を愛するような高慢な心をもたず、やさしく誠実に夫を愛しつづけるならば、彼女はどのような黄金にも勝る宝石であり、理想的な女性だと言ってよい。かつての宮廷恋愛でもてはやされた女性は、身分が高く美貌に恵まれ、教養も欠けるところのない貴婦人であった。しかし、詩人の倫理観からすれば、理想的とみなされたこのような貴婦人も、夫以外の男性とミンネを楽しむ限り、否定されるべき存在である。夫についても同様で、神の前で永遠の愛を誓った妻以外の女性と、ミンネを共有してはならぬ。どのような美名を与えられようと、そのようなミンネの本質は不倫であり浮気である。ひとたび一人の女性を妻として選び取った男は、当然ながら他の女性を一切あきらめるべきである。ここで詩人は、宗教上の立場を踏

まえて、当代の世俗界の不当なミンネを厳格に禁止する。

Swaz ich hie vor habe geseit,  
ich sprich nu von der wârheit  
und stätig ez mit mînem rât  
daz die vrouwen wesen stât  
an ir mannen, wan trûtschaft  
hât nuo ze hüfscheit kleine kraft.  
daz macht valsch, ruom, bæse huot,  
unstætekeit und übermuot.  
swelch vrouwe kiusche ist in ir jugent.  
hât si dar zuo dan dise tugent  
daz si vor höhvaart sî behuot.  
und daz si meine ir man mit guot  
und sî im ouch mit triwen holt,  
diust ein gimm vür allez golt.  
daz selbe sprich ich umbe den man:  
ja ensol er sich niht kêren an  
ander wîp; swer eine hât,  
der mac der andern haben rât<sup>47</sup>

《これ以前に言ったことを、私はこれから真実に拠って話そう。そして夫人であることは、夫があつてこそそのことだという助言をして、そのことをはっきりさせておこう。というのは、今日の宮廷恋愛は、宮廷作法のための力をもっていないからだ。そのような恋愛をさせるのは、偽り、自慢、邪悪な監視、心変わり、高慢である。若いときに純潔であつた女性が、そ

れに加えて次のような徳操をもつなら、すなわち彼女が高慢から自分を守ることができて、やさしくかつ誠実に夫を愛するような徳操をもつならば、そのような女性はあらゆる黄金に勝る宝石である。同じことを、夫についても話そう。夫たる者はまことに、他の女性に心を寄せてはならぬ。一人の女性をもっている男は、他の女性をあきらめて当然である。)

私たちはともすると、この時代の宮廷叙事詩や抒情詩によって強く印象づけられた影響から、宮廷恋愛を当代のすべての人々が、賞賛していたかのような錯覚に陥りやすい。しかし、ここで述べられたトマジンのミネネ観を吟味すると、確かに宮廷恋愛に対する大きな批判勢力のあったことが、明確に認識されうる。この論考は、13世紀前半のドイツにおける聖界と俗界が、ミネネに関しては、互いに切り結ぶ拮抗関係にあったことを、トマジンの教えを緻密に読み解くことによって、具体的に明らかにすることであった。

## 注

- 1) Burghart Wachinger(hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin, 1995: Thomasin von Zerklæreの項を参照。トマジンは、1186年頃に生まれた(没年は不詳)イタリアのアクレアのア司教座聖堂参事会員。ストア哲学とキリスト教倫理を基礎として、神による世界秩序を守るための思想を展開した教訓詩人でもある。
- 2) "Der Welsche Gast" これは、ドイツ人の最も良き力に絶大の信頼を置いていたトマジンが、中世高地ドイツ語の韻文で書いた道徳哲学の教科書とも言えるもので、キリスト教騎士の理想が説かれている。
- 3) Helmut de Boor/ Richard Newald: Geschichte der deutschen Literatur, Bd.2 (Die höfische Literatur), München, 1953. S.403ff., 413ff.を参照。トマジンは、「異国の客」を刊行する前に、既に同類の思想の書 "buoch von der

hüfscheit" を、イタリア語で著している。

- 4) 使用したテキスト：Heinrich Rückert(hrsg.): *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Berlin, 1965. 以下 W.Gastと略す。14752詩行から成る全十章の中で、第一章は第1詩行から第1706詩行まで。
- 5) W.Gast 1039-1040
- 6) Ibid. 821-828
- 7) Ibid. 1053-1058
- 8) Ibid. 1059-1061
- 9) Ibid. 1081-1092
- 10) Ibid. 1093-1117
- 11) Ibid. 1118-1134
- 12) トマジン自身も「異国の客」を書くときに、ドイツ貴族達に自分の教えを十分に浸透させるために、自身にとっては外国語であるドイツ語（中世高地ドイツ語）を、敢えて使用した。W.Gast 2445,11717ff., 12228, 12278ff. を参照。
- 13) Ibid. 1139-1162
- 14) Joachim Bumke: *Höfische Kultur*, Bd.2, München, 1986. S.516-522. ここでは、トマジンの思想と同様に、中世キリスト教の恋愛哲学の根本が、「宗教的な愛」*amor spiritualis* と「肉体的な愛」*amor carnalis* であり、*hohe Minne* と *niedere Minne* も、同質の対概念であることが述べられる。
- 15) Ibid. 1176-1200
- 16) Ibid. 1213-1220
- 17) Ibid. 1221-1242
- 18) Ibid. 1243-1258
- 19) Ibid. 1259-1278
- 20) Ibid. 1279-1303
- 21) Hugo Moser/ Helmut Tervooren(hrsg.): *Des Minnesangs Frühling*, Stuttgart, 1982. 以下 MF と略す。Heinrich von Morungen: MF (130,15) (141,1-4), *Der Burggraf von Rietenburg* : MF (19,29)を参照。
- 22) W.Gast 951f., 956 ; Heinrich von Rugge : MF (107,27-29)を参照。
- 23) W.Gast 1304-1322

- 24) Ibid. 1323-1337
- 25) Ibid. 1338-1353
- 26) Joachim Bumke: *ibid.* S.503-529
- 27) W.Gast 1354-1371. テキストの解釈に際しては、次の研究書からも少なからず恩恵を受けた。Ernst Johann Friedrich Ruff: *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zerklære, Untersuchungen zu Gehalt und Bedeutung einer mittelhochdeutschen Morallehre*, Erlangen, 1982.